〔資料・作家紹介〕
近代播磨の美術作家

平　瀬　礼　太

以前「『鷺城新聞』と美術」(注1) と題して、明治末から大正初期に至る播磨地域（現在の兵庫県西南部）の美術動向を探る機会があった。その時は掲載紙面の関係で新聞記事にあらわれた美術動向を時間の経過に従ってたどることしかできなかった。調査段階で記事に現れた様々な作家の名前は恥ずかしながら知らないものばかりであったため、鷺城新聞の記事内に時折あらわれる作家のプロフィールや、各種の画家名鑑の類をあたって、それらがどのような作家か調べたのであるが、結果的には掲載に至らなかったため、今回は明治末以降（一時的にせよ）播磨で活躍した作家たちに焦点をあて、下に紹介したいと思う。

もちろん行き届いた調査ができているわけでもなく、不足が多いデータではあるのは十分承知しているが、これまで播磨の近代美術、特に明治期や大正期の美術に関してまとまった調査がなされたことや資料が発表されたことは非常に少ない状況であることから、ともかくもまず最低限の情報を提示して、今後の資料調査や作品調査に繋げることが可能になればと考えた。基本的には鷺城新聞紙上に登場した作家を中心に扱っているが、調査の際に参照した様々な事典、図録等に掲載されていた播磨関係作家についてもなるべくあわせて紹介することに努めた。特に明治、大正期の資料には誤りや誤解も散見されるため、ここで紹介した作家たちの履歴等にも訂正が必要なものも少なくないと思われる。今後の様々な指摘や意見を期待している。

注１　「『鷺城新聞』と美術（播磨の動向を中心に）」鷺城美術調査会（平瀬礼太、岸野裕人、生田国男）
　　『播磨学紀要』第七号　播磨学研究所　2001年10月発行　に掲載

1　鷺城新聞に掲載された作家

ここでは鷺城新聞の明治末～大正初期の記事に記載のあった播磨関係作家を取り扱う。播磨と関係の薄い作家、経歴不明の作家は割愛した。作家略歴の内容については鷺城新聞の大正３年の15周年記念の連載記事（このときの掲載図版は「『鷺城新聞』と播磨の美術」で紹介したため、ここでは掲載していない）及び『大日本書畫名家大鑑』等の記述を参考にして補足した。作家の順番は50音順。

※（鷺）は明治末～大正初期の鷺城新聞の記事内容を参照したもの
（鷺15）は鷺城新聞15周年記念の連載記事を基本的にそのまま抜粋している
（大鑑）は『大日本書畫名家大鑑』（荒木矩編　1934年　大日本書畫名家大鑑刊行会）の記事の抜粋
（年鑑）は『日本美術年鑑』（1911年　画報社）の記事の抜粋
（帝国）は『帝国絵画名鑑　現代之部』（1913年　帝国絵画協会編集部）の記事の抜粋
（20世紀）は『20世紀物故日本画家事典」（1998　美術年鑑社）の記事の抜粋
その他、「東京美術学校・東京芸術大学美術学部・東京芸術大学大学院美術研究科同窓生名簿」（昭和47年版）も参照した。
また、必要に応じて筆者が参照文献等について※印の後に補足している。
基本的に旧字体は新字体にあらためている。
判読できない文字は□で示している。
年号については算用数字を用いているが、引用した文章内の数字は漢数字のままにしてある。

明石祥雲－（鷺）明石郡出身。岸竹堂の高弟で遺鉢を受けたという。明治43年には姫路市野里河間町雲松寺で画会を開催した。また、同年宇治黄檗山大方丈の襖に松に鷹の図を揮毫。

赤松南峯－（鷺）姫路市北条口に住む。肖像画を描いていたという。明治43年の名古屋に於ける新古美術品展覧会に「名妓と花」を出品。

朝見香城－（鷺）明治44年に揖保郡新宮で丹誠画会第１回展を開催した。

新井　完－（鷺）大正３年に郷里姫路の求めに応じて姫路市北条口の寺尾氏に揮毫希望者を依頼した。
（年鑑）新井完－明治十八年六月二十七日姫路市に生る、画家、西洋画、四十三年三月東京美術学校西洋画科卒業、現住所東京市四谷区須賀町四四。
（大鑑）新井完－、明治十八年姫路に生る、東京美術学校西洋画科出身、現帝展委員
※新井については『新井完展』図録（1992年　姫路市立美術館）を参照のこと

伊藤豐水－（鷺15）氏は幾次郎といひ明治十六年三月飾磨郡下手野村に生る、祖伊藤弥左衛門は江州彦根藩士にして文久三年九月大和に於て討死す、其子栄太郎は父なり廃藩後姫路に移り、近年大阪に住す、夙に絵画を好み、初め南画を姫路の嶋琴江翁に学び、翁の歿後大阪に於て五井金水、久保田桃水氏に習ひ、更に京都竹内栖鳳の門に入り、其教を受け当市並に阪地に於て清雅畫會を開催せしこと数回、嘗て東宮殿下に献画の栄を担ひ、尚ほ又各所の展覧会に於て賞牌賞状を受けしこと屢々なり、今や氏の技益々進みて青年画家の錚々たるもの、切に自重を祈る。

伊藤鷺城－（鷺15）氏は当市綿町の出身にして幼時より画を好み十一歳にして神戸に出で苦学大に黽め貿易品の揮毫を為し当時已に一廉の画家たるの資あり丹青界麒麟児と称せらる、更に奮然志を立てゝ東都に出で歴史画の大家谷口香嶠翁の門に入り研鑽を積み技其堂

奥に入る、今京都に於ける歴史画専門家として名声を馳せつゝあり、氏の令閨小坡女史も又香嶠門下の秀媛にして盛名あり。

（年鑑）伊藤又次－号鷺城。明治６年姫路市綿町生。日本画。谷口香嶠に師事。京都美術協会会員。明治34年４月より43年に至る間京都新古美術品展覧会及び第５回内国勧業博覧会にて四等賞６回、五等賞２回。現住所京都市上京区室町通夷川下ル。

（20世紀）伊藤鷺城－1873-1948。明治６年１月20日、姫路市に生まれる。本名又次。谷口香嶠に師事、京都における新古美術品展で受賞を重ね、36年第５回内国勧業博覧会に「涼風」で入選する。41年同門の宇治土公小坡と結婚。京都美術協会会員。昭和５年第２回聖徳太子奉賛美術展に「義平追重盛」で入選する。昭和23年８月８日歿。享年75。

巖本圓嶺－（鷺）明治41年４月に彩色密画「楠公笠置山図」を安田香他にを通じて姫路市の武徳殿に寄贈した。

（年鑑）巖本繁治－号圓嶺。弘化四年三月二十九日播磨邦神崎郡東多田村に生る、画家、日本画（円山派）、渡邊丹崕に師事す、明治二十二年仏国巴里万国大博覧会に出品し銀賞牌を受領す、著書「絵画哲学論」あり、現住所京都市上京区三本木上之町二。

※神崎郡東多田村は現在の姫路市山田

（大鑑）巖本圓嶺、弘化四年播磨に生る、通称は繁治、野村雲鳳の門人、円山派画家

※野村雲鳳は播磨の画家

（帝国）圓嶺　巖本繁治－本姓は上山、字は子原、別に□眠、橙樹齋。同遊屋好遊の号あり。弘化四年三月二十三日を以て兵庫県神東郡多田村に生る。天性画を好み初め上村春鳳に就き後渡邊丹崕に師事して四条派及び円山派を修め山水花鳥動物悉く之を能くす明治二十二年仏国巴里万国博覧会に牡丹に鶏。柘榴に昆虫の図を出品し名誉銀牌を受領し。同三十七年信州米子滝の図は天覧を賜る帝国絵画協会の会員にして。現に京都東三本木ノに住す。余技として測量術を能くし、和歌　□築　釣魚　狩猟を好み古今和歌□を著す。

※巖本圓嶺については拙稿「巖本圓嶺と２人の子－姫路ゆかりの画家」『美術館だより』76号（2002年　姫路市立美術館）を参照のこと

巖本冬嶺－（鷺15）君は明治四年七月二十四日姫路市元塩町に生る。姓は巖本、通称宮次冬嶺、孤松の号あり、父は巖本圓嶺と号し四条派を究め目下京都上京区東三本上之町に住す、幼にして奇才あり、また絵画に頗る趣味を有し嬉戯の間にもつねに人馬を描けり、父圓嶺の画才あるを見、意を用ひて之れを指導す、技大に進む、殊に人物を能くす、明治三十九年以来高松高等女学校教諭に任ぜられ専ら図画を担任す、明治三十三年巴里万国大博覧会に学画帖と称する著書を出品して銅賞を受く、現に高松市六番町に住す、余技として洋画特に鉛筆画に長ず、性磊落、障壁を設けず、一見旧知の如く、財を積むが如き愚を学ばず。真に之れ風流を領する人なり、こゝに挿入するは君の謹写にかゝるもの、賛は当地笠置晴坡氏の筆にて筆蹟頗る雄勁なり。

（年鑑）巖本定次－号冬嶺。明治四年七月二十七日姫路市に生る、香川県高松高等女学校教諭、日本画（円山派）、及西洋画（油画）、父巖本圓嶺に学ぶ、明治三十三年巴里万国大博覧会に自著「畫學帖」を出品し銅賞牌を受領す、現住所高松市六番町一〇。

（大鑑）巖本定次、明治四年姫路に生る、圓嶺の子にして圓崖の弟なり、画を父に学ぶ

（帝国）冬嶺　巖本定次－圓嶺の男なり。別に孤松と號す、明治四年七月二十四日兵庫県姫路市元塩町に生る、父に就きて圓山派を修め、殊に人物を能くす、明治三十九年以来高松高等女学校教職に任じられ、専ら図画を担任す、明治三十三年巴里万国大

博覧会に学画帖と称する著書を出品して銅賞を受く、現に高松市六番町十番地に住す、余技として洋画特に鉛筆画を巧にす。
※巖本冬嶺については拙稿「巖本圓嶺と２人の子－姫路ゆかりの画家」『美術館だより』76号（2002年　姫路市立美術館）を参照のこと

小川晴暘－（鷺）大正３年11月22日から26日まで姫路市総社公徳殿で洋画家として展覧会開催。
※のち写真家となり奈良に飛鳥園を創設。

小野周文－（鷺15）名は寛、字は子明、周文と号す。播磨網干の産にして京極佐渡守の世臣たり。法橋周得氏に学び、更に横山清暉氏の高弟宮崎霞谷氏の門に入り後円山応挙の風を慕ひて研精すること久し。往年姫路に住し、森岡兵庫県令及び松方大蔵卿等の知遇を得、後大阪に移る。摂河泉大演習挙行に際しては、先帝行在所に献進画の栄を被り、今上陛下御慶事に際しても、献画御嘉納、賞状を賜はる。博覧会出品に対する受賞少からず、今や郷里に在りて、斯道に精励せり。
（鷺）温厚篤実の人で四条派の画家。俳句も嗜んだ。
※周文については謙堂外史「小野周文翁ノ伝」（1923年）及び、池田昌夫「華麗な画風　日本画家　小野周文翁」に詳しい

小野素文－（鷺15）氏は播磨の人、四条派の耆宿周文翁の息なり。幼時厳君に就きて四条派の機微を穿ち、上田耕作翁の門に入り研鑽年あり。更に洋画家山田愚僊氏に就きて学び、今や東洋画の風韻気魄の美を加へて肖像画に一新機軸を開くに至れり。多能なる氏は観音の仏画を描くに傑出し、洗練熟達、諸会に出品して受賞すること少からず。
（鷺）大阪の画家。小野周文の息。幼時父に四条派を学び、上田耕作の門に入る。更に洋画家山内愚僊に学ぶ。
（大鑑）小野篤、明治十一年姫路に生る、上田耕沖、山内愚仙の門人、大阪住

大谷小苑－（鷺15）小苑女史は本派本願寺播磨国亀山別院連枝大谷昭然師の裏方朴子夫人にして、同本願寺法主光瑞上人の叔母君、前明如上人の令妹たり。現に播磨報国婦人会長として幾多会員を統率し、日露戦役当時には綿服草履穿きの素々たる扮装にて姫路予備病院に通ひつゝ、傷病兵士を慰はり、更に出征軍人及び遺族の慰問に勉めじは隠れなき事業なり。女史の如きは、実に婦人としての模範人物にして、而も能書能画、入つては内助の功、出ては報国の業、共に欽すべきもの多きかな。

金子天梁－（鷺）今井天禄の門下生で姫路市北条口に寓居。字は清、通称正信。備中高梁の生。明治37年神戸市長田村長福禅寺内清林畫塾で円山派の今井天禄に師事。その後姫路に移り揮毫。

河野通鶚－（鷺）揖保郡網干町興の浜村に住む。河野鉄兜の実弟で香邨と号す。書画等に巧みで明治43年２月現在76歳の高齢でありながら、かくしゃくと密画を描く際にも眼鏡をかけなかった。自宅で医業を開き、町医、警察医を兼ねていた。
（20世紀）河野香村－1835-1912 。天保６年８月17日、播磨国（兵庫県）龍野に生まれる。兄は勤皇の医家・漢詩人河野鉄兜。医業のかたわら香村誠塾を開設、子弟の育成につとめる。山水画と書をよくした。明治45年６月10日歿。享年76。
※通鶚の画業については2002年11月に開かれた「河野鉄兜と香邨（東馬）遺墨展」パンフレットに詳しい。それによると、彼は天保６年８月17日河野三省五男として網干町垣内に生まれ、幼時より兄鉄兜に従って学を修め、西国歴遊にも同行した。1864年には鉄兜の門下安藤鉄馬と共に久坂玄瑞の一隊に加わり禁門の変に参加したという。後に家業を継ぎ、更に分家して、医業の傍ら稲香村舎誠塾という私塾を開き、明治22

年に私立学校として公認された。明治45年６月10日に逝去し、善慶寺に葬られた。

近藤鷺峰－（鷺15）鷺峰氏は姫路の人、翠松を抽んでて、雲間遥かにそゝり立つ白鷺の城に因みての雅号なるべし。幼にして頴悟、苦学丹青の技を研鑽し、今は亡き師野村文挙氏か「学問技芸は進みて求むべく、与へらるゝを待つべきものに非ず」てふ、入門の訓誨は、遂に君をして画に対する信条たらしむるに至る。嗜好読書に在り、又以て愛すべし。年歯僅に二十有七、前途春秋に富む、何ぞ多望なるかな。

（鷺）姫路市出身。東京で画家として活動していたよう。明治42年に姫路商業会意匠部顧問となる。後に枚方に在住。

笹森憲之助－（鷺）龍野に在住。明治43年に揖保郡各小学校教員有志が組織した図画研究会で講師を務める。

芝順誠　－（鷺15）氏は当市（※姫路市のこと　筆者注）南町本派真宗光徳寺の住職にして亀山別院の執事たり、院の内外の法務は細大共に氏の頭脳と手腕に倚るものなり。学徳併び高く誠熱以て弘法伝教に尽し信徒の崇敬亦た厚し、平素沈着寡言なるも事に当つて雄弁滔々と論じ喋々と語り人を説破して余す所なし、氏は号を竹堂と云ひ亦た風流韻事を嗜み宗務の余閑あれば詩を賦し画を描きて風懐を恣にす、画風は南宗派に属し斯道専門家の塁を磨す。

下田天香－（鷺15）君は当地（※姫路のこと　筆者注）の人、学者として、詩人として将たまた南画家として其の名遠近にきこゆ、君の厳君は姫路藩士にして文事に長じ、桂屋と号し詩文を能くし又畫を能くせり、されば其の子として生れたる君は幼少の頃より父桂屋に就いて詩、書、画を学ぶ、桂屋は有名なる玉堂の一子浦上春琴に就いて南宗派の奥義を究めたる人にて其の画風は神韻を帯び稀に見るの名手なりしといふ、君亦其の遺鉢を受け其の描くところ奪ふべからざる気品あり、曾つて飾磨県参事、印南郡長たりし事あり、また姫路中学校へ職を奉じたる事あり、性、温厚、君子風の人にして辺幅を飾らず、障壁を設けず、其のいはんとするところは之れを言ひ、其のなさんとするところは之れをなす底の人にて即ち是を是とし、非を非とする人なり、姫路教育奨励会や播磨史談会の創立に与り功労あり、目下酒井伯爵家の評議員たり、白鷺吟社を主宰す桂園の別号あり。

正司春海－（鷺15）齢古希を過ぐる、一枝の彩毫に健軀を托して今や南宗の深義を究む。元淡州郡家の人、幼にして丹青を好み、弱冠にして京師に遊び、日根対山の門に入り、山水花鳥を錬磨し、傍ら明清の大家を慕ひ、遂に南宗に入る、遊踪天下に遍く、其名斯界に鳴る、現に姫路に居を卜す。

（鷺）大正２年に姫路市十二所神社社務所楼上で揮毫会開催。

（大鑑）正司春海、弘化元年播州に生る、南画家

高橋草山－（鷺15）字は従彦、旧三草藩士正明氏の男にして嘉永五年五月播磨加東郡三草に生る、公務の余暇芥子園画伝に依りて独習し、又椿華の流を酌み、明治十九年三月上京して渡邉小華、瀧和亭、川辺御楯等に就きて南宗派を究め、同年横浜に開設せる東洋絵画会及び石川県絵画共進会に出品して共に褒状を受け、伏見宮殿下第十師団長として御在職中御額面揮毫を命ぜられる。現に播磨史談会幹事たり。

（鷺）※高橋草山については「『鷺城新聞』と美術」内でも比較的詳しく掲載しているが、まとめてここで確認しておきたい。まず、明治41年11月１日に画会を忍町靄楽園で開催し、空前の盛会だったと記されている。また、明治43年５月19日には詳しい紹介がなされているので下に要約して記す。

明治43（1910）年 5月19日（・・・の部分は省略）
姫路人士訪問期（十七） 濤花 畫家高橋草山君
「姫路畫界唯一の明星たる草山高橋正身君を北條口なる氏の邸に訪ふ・・・。談は氏が三草藩出身より、舊飾磨縣に奉職せしこと、故渡邊致靜君と共に、加東郡社村なる出張所に勤務し、彼は租税を掌どり氏は出納掛たりしことなど・・・。氏語らく、明治の初年から十年頃までは、姫路市にも、書畫漢籍に通ぜし人少なからず、故松平淳典氏の如き、常に來往して、斯文の爲に相會し、或は白鷺吟社を設けて詩文を闘はし、書畫、古器物を評論せしことありしも現今は寥々寂々の有様となれりなど語れり・・・。現代の人は利にのみ是れ走り、高尚清雅なる趣味を味はんとするもの更になく、滔々世を擧げて、名炎利熱に追はれつゝある有様なれば、生中これが矯正を企てんとすれば、狂と呼ばれ、愚と叫ばれんこと必せり。けれども、是非かゝる高尚なる趣味の會合こそ望ましきものなり云々・・・。記者が書畫に趣味を有することを語りしにより、渡邊華山の遺稿など示され、仁壽山講學、摩島弘氏の筆蹟、岡崎眞鶴の墨竹の一軸など數点の古書畫など觀覧し、氏の近作たる牡丹双猫の畫など、相當の佳作なるを見受けたり・・・。」

（年鑑）高橋正身（マサチカ）ー号草山。嘉永5年加東郡三草町生。南宗画。川邊御楯に着色の法を学ぶ。日本美術協会会員。明治19年5月石川県共進会褒状。20年横浜公園の共進会で褒状。23年第3回内国勧業博覧会出品。33年5月伏見宮より姫路御在住記念の額揮毫の命を受け特に落款の命を受け目録を賜る。現住所姫路市北条口五二。
（大鑑）高橋草山、名は正身、字従彦、嘉永五年播州三草に生る、芥子園画譜を法り画を修む。

建部天斎ー（鷺）揖保郡林田旧藩主建部秀隆子爵の次男。山名貫義、川端玉章に学び、今井天禄の清林画塾に入った。

谷秋清 ー（鷺15）君は播州曾根町の人、幼にして画才あり神戸市藤田秋塘の門に入り専ら丹青の技を修む、旅行に趣味を有し閑あれば笻を郊外に曳く諸方を遊歴し汎く人情風俗を研究す、山水花鳥は其の長所にして筆致頗る雅なり年齢二十有五、春秋に富む、資性温厚、読書を好みまた囲碁を好めり、

田畑好秀ー（鷺15）名は順之祐。好秀と号す。播磨加東郡社町の出身にして、幼時故厳君芳秀氏に就て四条風を学び、明治二十二年欧州に遊びて油絵を研究し、同三十年帰朝、姫路との縁故浅からず、明治三十九年第十師団管内各将校の肖像画を描きて喝采を博し、少からず珍重されたることあり、現に神戸市琴緒町五丁目八六に住して画名鳴る。
（大鑑）田畑順之助、明治八年兵庫県に生る、四条派をえがく、神戸住

民輪文岳ー（鷺15）明治七年播磨加西郡多賀野村ノ内国正村に生る。亡父文山と号して畫を能くし、氏は。幼時郷土の畫先生丸山假州に師事して早くも丹青に親み、明治二十八年神戸に移り、現に三宮町一丁目に住し、画を以て家を為す。大正二年東京研美會に出品し一等賞を得、更に大正二年第四會大阪浪華画会、同年長野市月並画会に、大正三年第三回東京研美會等に出品して孰れも一等賞を得画名正に世に鳴る。

坪田豊年ー（鷺15）［前略］豊年氏は仏画、人物を専門とし、実に姫路の産なり。年少双親に伴はれて神戸に出で、更に三好氏に養はれて画を学び、後東上して芝区三田松本町に住し、専ら画事に親む。今や神戸楠町に滞在し、大阪深田直城氏に就き花鳥を学ぶ。又以て

其向上溌剌の気を認むるに足るべし。

（帝国）豊年　坪田信次－字は萬作、別に食石の号あり、明治二十二年三月十六日を以て播磨飾石郡城北村の内八代村に生る、幼にして、画を好み初め神戸市の画家三吉賢に就き住吉派を学び後今尾景年に師事して鈴木派の画法を究む、描く所山水花卉羽毛一として能くせざるはなしと雖も就中仏画は最も得意とする所なり、帝国絵画協会及び巽画会の会員にして、現に神戸市上澤通三丁目七番地十二号に住す、画道の外旅行を好む。

都守竹山－（鷺15）氏は元明石藩士上山竹垓の三男、安政七年生る、幼にして加古川町都守氏の嗣となりて同氏を襲ぐ。年少より画を好み池田春暉、細谷玄齋の両氏に就て南宗画法を学び大に得る所あり、後明清の諸大家の遺墨を欽慕して熱心に自修研鑽の結果其奥を究め遂に一家を為す。壮年時代教鞭を執つて育英の業に従ひしも、一朝之を捨てゝ専ら画筆に親しみ明治卅五年当市（※姫路のこと　筆者注）に移住して雅人墨客間に好評あり、氏は資性質朴にして敢て名利に走らすと雖も其の名声を聞いて門を叩くもの続々あり、昨春二月地方有志の勧誘斡旋に依り画会を催したるに忽ち百八十の会員を得、夫より氏の名声益揚る、氏始め紅葉山人と号せしか此時より先考の号に因み竹山と改む。氏は古書画及骨董を愛し斯道に精通し最も古画の鑑識に於ては達眼を有せり。

（鷺）大正２年２月に姫路市の靄楽園で画会を開催。

庭山耕園－（鷺15）氏は姫路の産にして別に芝蘭香處、また珍十の号あり、画は耕冲翁に師事して円山派を修め出藍の誉あり、特に花鳥を得意とす、嘗つて浪華画学校に久しく教授として後進を扶掖する所多し、第四回勧業博覧会其他各地共進会、展覧会等に優賞を受くること十数回、又た御前揮毫の光栄を荷ひたることあり、現に帝国絵画協会、東洋美術会の審査員にして、今や名声関西の画壇を圧して噴々たり。

（年鑑）庭山慶蔵－号耕園。明治二年一月十四日姫路市綿町に生る、画家、日本画〔円山派〕、上田耕冲、鈴木松年に師事す、大阪絵画協会委員、大阪美術会顧問、大阪実業協会美術部委員、巽画会々員、第四回内国勧業博覧会及び第五回内国勧業博覧会に於て共に褒状を受く、現住所大阪市東区北浜四丁目三七。

（大鑑）庭山耕園、名は慶蔵、明治二年姫路に生る、上田耕冲、鈴木松年の門、大阪住

（帝国）耕園　庭山慶蔵－別に芝蘭香處、珍十の号あり、明治二年一月十四日姫路市に生る、耕沖に師事して円山派を修め、殊に花鳥を能くす、明治十六年より同二十三年まで大阪浪花画学校教授をなす、第四回内国勧業博覧会を初め諸種の共進会展覧会等に出品して優賞を受くる事十数回、曾て御前揮毫の光栄を受く、帝国絵画協会、大阪絵画協会の会員にして、大阪絵画及び東洋美術会の審査委員にして、現に大阪市東区北浜四丁目に住す。

※耕園については「庭山耕園　作品と素描」（庭山慶一郎製作　1988年）、「大阪を愛した孤高の写生派　庭山耕園・花鳥画の世界」展（大阪市立美術館　1995年）パンフレットに詳しい。

橋本寛晃－（鷺15）幼より絵画を好み、常に師を尋ねて学び、後東京荒木寛一の門に入りて諭導を受け、さらに中村寛亭氏に学び、遂に南宗派の深義を穿ち、就中花鳥人物に特妙なり。今や関西漫遊の途、姫路城下にあり、諸方の需めに応じて彩毫を揮へり。

（鷺）福島県田村郡中妻村字鷹巣出身。東京の荒木寛一、中村寛亭の門人で唐画南宗派。明治44年に関西漫遊の際に姫路市に滞在した（明治45年には姫路市西紺屋町に滞在していたことがわかっている）。大正２年２月に姫路神社社務所で展覧会開催。大

正３年６月には飾磨町紀の市楼で画会開催（この頃では姫路市上白銀町に在住）。

橋本関雪－（鷺）※関雪については鷺城新聞の各所に記事があり、人となりがよくわかる。
詳しくは「『鷺城新聞』と美術」を参照していただきたい。
（鷺15）関雪橋本氏、名は貫一、神戸に生る、現今明石町居住儒家海関翁の息なり、生れて三歳慈母の乳房を索むるころ紅葉の如き手に筆を握り無心に人馬を描きて厳君を駭かせり、五六歳の時嬉戯の間、竹片を拾ひ取りて砂上に描くところのもの凡てこれ画なり、隣人看て以て奇となす、稍長じて竹内栖鳳氏の門に入り専ら丹青の技を励む、森羅万象悉く氏の筆にならざるなく、天才に加ふるに修養を積むこと深きは、蓋し今日の盛名を馳する所以か、文部省展覧会に於て受賞すること数回、昨秋の文展には一躍最高賞を得て、画名頓に顕はる、資性快活能く談じ、能く飲み、多芸多才、詩を能くし、書に巧みに、時に又句を吐く、先年渡清し蜀の三峡に遊び、今秋再遊の意ありと、大正の絵画史を飾るものは、それ君か、
（年鑑）橋本寛一－号関雪。明治十六年十月神戸市楠町に生る、画家、日本画、竹内栖鳳に師事す、巽美術評議会、先年美術研精会五周年大会に於て研精賞牌、全国絵葉書展覧会に於て銀牌、文部省画会展覧会に於て第三回、第四回、第五回共に褒状を受く、現住所東京市下谷区谷中清水町十九。
※橋本関雪については自著も関連文献も多く、展覧会図録も多数発行されているため、それらを参照されたい。

福田芳雲－（鷺15）県下加東郡の人、今や神戸市加納町四丁目二百二十五番地に住し、研美会員たり。幾多青年画家を出しつゝある加東郡は現に此芳雲氏を有して其新鋭の気を増す。始め四条派の画風を学び。故芳秀氏に就て研究すること年あり。技は既に一家を為すに足るも、未だ以て安んずべからず。古の所謂学ぶこと愈々深うして愈々己の愚なるを知る、又是れ氏が画に対する信条なるか。

藤岡了空－（鷺15）青山の法洞に趺坐して、衆生済度に余念なき了空藤岡師は、麻衣蓬髪、枯瘦仙に似て而も仙ならず。仏を説き、儒を談じ、漫筆縦横、世道を益し、人心を正うす。心既に俗世を離れて、身は唯百丈の塵煤に埋る。室掃はず、髪梳らず、而も吐けば即ち警世済生の語を為す。
※青山とは現・姫路市青山のこと

藤本煙津－（鷺15）神崎郡田原村の産、本姓は繁内氏、字は古素、別に同龍生、又榛田野逸と号す、俗称節二、画は嶋琴江、村田香谷等に従ひて南宗派を究め殊に山水を得意とす、各地の画会に又は協会より褒状を受くること多し、氏は画名に現はるのみならず、詩文に書に将又た篆刻に皆其堂奥に達す。
（大鑑）藝（ママ）本煙津、名は節二、嘉永二年播州に生る、村田香谷、江馬天江の門人、大阪住
※煙津については「藤本煙津遺作集」（1977年　藤本煙津顕彰碑建設記念出版）、1999年に開催された「藤本煙津展」（福崎町立神崎郡歴史民俗資料館）パンフレットに詳しい

三木翠山－（鷺15）氏は我が播州加東郡社町の人、年少画道を志し京都に出で、竹内栖鳳氏の門に入り、孜々刻苦学んで倦まず、栖鳳門下の俊才として塾中に鳴る、最も花鳥を能くし、巍然頭角を現はし昨秋文部省展覧会に出品し、入選の栄を得て頓に画名揚る、年歯三十有余、尚春秋に富む、将来の大器たるを疑はず。
（大鑑）三木翠山、名は斎一郎、明治二十年七月播磨に生る、竹内栖鳳門下、昭和六年帝展推薦、京都住

（20世紀）三木翠山－1887-1957 。明治20年７月15日、兵庫県に生まれる。本名斎一郎。竹内栖鳳に師事、竹杖会で研鑽を積む。大正２年第７回文展に「朝顔」で初入選、以後文展に毎回入選、帝展には９年第２回、10年第３回で入選したのち15年第７回から入選を重ね、昭和７年帝展推薦となる。この間、15年第１回聖徳太子奉賛美術展に「旅の宿」で入選、昭和11年秋の文展招待展に「茗宴」を招待出品、12年からの新文展にも無鑑査出品を重ねる。昭和32年３月25日歿。享年69。

八木文卿－（鷺15）播州林田藩の儒河野鉄兜の門を出て、更に大槻磐渓、落合双石に学を問ふ幼時龍野藩の画師八木墨仙に狩野画を学び、又齊藤畸庵、瀧和亭等に就て南宗派を究む。各共進展覧会よりの受賞少からず、嘗て日本美術協会総裁宮殿下より日本美術協会褒状を賜はり、更に諸学校教職を奉じたることあり、別に八十八道人と号す、画名高し（鷺15）其の画に於て其詩に於て今神戸の文墨会に先づ指を屈せらるゝ、氏は播州林田藩儒河野鉄兜門下の俊才たり、更に大槻磐渓、落合双石等大家に就て詩文を学び、画は龍野藩の八木墨仙に学び、後南宗派の齊藤畸庵、瀧和亭等に師事し其奥を究む、壮年暫く当市に遊びて米文卿の名大いに喧伝せらる、貴顕の方々よりも屢々賞状を賜はり又各地共進会、或は美術協会等より褒状を受けたること夥多あり、嘗つて各学校に教鞭を執りて育英の職に従ひたるも今や悠々自適閑雲を侶とし彩筆に風懐を恣にしつゝあり。

※八木文卿は鷺城新聞15周年特集記事に２度掲載されている。

※八木墨仙は文政８年生まれで揖西郡龍野町787番屋敷に住んでいたという。明治25（1892）年に没している。

安田香谷－（鷺15）氏は当市（※姫路市のこと　筆者注）本町に住す、名は信元、字は子宣、号は香谷、別に賞古道人、又幽芳園の号あり、幼より画を好み南宗派の画伯嶋琴江翁に学ぶこと多年技大に熟達し同門下の高足にして代師となり門下生を教ゆること久し以て画道に造詣深きを知るべし、又傍ら骨董盆栽を業とし書画骨董品に対し眼識深く園芸盆栽の培養に巧みなり、当市及附近の風流界に氏の名大に振ふ、曾つて明治十八年先帝陛下当市御駐輦の際及同三十六年、同四十四年の両度先帝陛下当市御駐蹕の砌にも行在所便殿の装飾を承はり又伏見大将宮殿下御在職中殿下の愛顧を受け常に御殿に伺候して、盆栽栽培のご用命を承り嘉賞せられ、川村大将にも愛賞せらる、其他陸軍の集会、地方の公共事業又は雅会等には熱心に装飾斡旋に尽し各方面より感謝状を受くること枚挙に遑あらず。

柳井芝耕－（鷺15）氏は当市（※姫路市のこと　筆者注）元塩町の産、通称は一郎、芝耕又は鶯集と号す、年少より絵画に趣味を有し、稍長して大阪に到り一たび実業に従事せしも、性来の嗜好は牙寿の人たるを許さず、翻然画家を以て世に立たんと決意し、転じて庭山耕園画伯の門に入り、之に師事すること多年日夜孜々として研究を怠らず技大に進み、明治卅六年の京都絵画共進会に春秋二回其の作品を出陳し又三十八年名古屋に於ける全国美術絵画共進会に出品し、いつれも入選して褒賞を受けたり、今や郷家に帰りて其の得意の彩筆を揮ふて専心斯道の研鑽に努めつゝあり、年歯三十有四、尚春秋に富む、前途正に多望なり。

（鷺）明治44年４月に姫路神社で揮毫会開催。

山本信太郎－（鷺）明治42年に姫路商業会意匠部顧問となる。明治45年７月には姫路市の靄楽園で画会を開いた。

※下記は『新美』昭和17年12月　山本廣洋氏追悼号より

明治21年姫路市久長町生。筆名杢兵衛、黙兵衛。廣洋と号す。明治40年東京美術学校

卒。大正元年より３年まで神戸一中で絵画の教鞭をとる。大正４年から８年まで神戸又新日報に執筆。大正４年神戸新聞社入社、昭和10年同社嘱託となる。昭和５年より９年まで大阪時事新報にも執筆。兵庫県美術協会主宰者として県展を36回開催。昭和17年兵庫県新美聯盟の幹事となる。同年死亡。美術雑誌「画室」の刊行者としても知られ著作に「漫畫遊記」あり。

※実際は明治45年３月に東京美術学校日本画科を卒業している。

吉田正七－（鷺）龍野に在住。明治43年に揖保郡各小学校教員有志が組織した図画研究会で講師を務める。

※東京美術学校日本画科選科を明治38年７月に卒業。号深草。昭和４年12月25日歿。

脇坂安之－（鷺）龍野に在住。明治43年に揖保郡各小学校教員有志が組織した図画研究会で講師を務める。

※東京美術学校西洋画科を明治38年７月卒業。昭和14年２月７日歿。

和住栗谷－（鷺）美嚢郡三木出身。姫路にも滞在していたことがある。大正３年現在で大阪市西区江戸堀南通５丁目に寓居。彫刻家で書画もたしなむ。